

一貫流

勸善之卷

大野又兵衛一貫

傳佐藤清衛門

河毛 勘

述

一貫流勸善の巻は吾が道場の聖書なり

何故ならば一貫流的文献は之一つ吾有するが故也

光尖版前書
き(03.10.25)

一貫傳射則條目 勸善之卷

定體

足踏之事 踞之事 胴作之事
腰詰之事 身規矩之事

臨射

弓構之事 矢番ノ事 懸之事
當掌之事

眼鵠

見渡之事 志物見之事 徹底物見之事
始末物見之事 心眼之事

調彎

打起之事 押手之事 勝手之事
弓形之事 一文字規矩之事

滿固

付之事 臂形之事 肅之事
塩之事

心氣

位之事 澄之事 息相之事
氣離之事 氣誥之事 響之事

發射

放之事 矢色之事 弦音之事
弓旋之事 調子之事 矢聲之事

斂射

念之事 弓仆之事

以上三十八个條

一貫傳射則 勸善之卷 演説

定體

○足踏之事

夫れこの个條かを第一に出す事、身体足踏を以て定極とすればなり。足踏は弓手を指懸け、爪先を向に踏み、馬手は扣ひかえて歩アユミの儘ままに踏む。但し弓手の爪先も強向あながちのみに容カタチックリするに非ず。唯己が踏よき所に任せ、身体スワリの居を肝要とすべし。此の足踏の形を外ソト八文字と云、是形に拘とるにあらず。八文字の筆意を取べし。予が射則に寸尺を窮とずは其人々に應こたすべき為なり。但し初學の人には其法則ノリなくては調とい難ときに仍なて、かりに己が長計尺を以て定つべし。左右の踵己が肩口の幅長タケに踏のりを則のりとす。弓は精心上に凝こて下空虚すれば足踏を強く踏ふむべし。亦一概に強踏カタクツに偏ひとへて是に凝こは柱ヒラに膠まといつくして瑟おほこを弾するが如し。考かんがべし。或は常射ならず。臨機カタヨツ応變（まといつく）に依て足踏定るべからず。騎馬 船中 險易さわ 澤あるい 何等に及さといえども、僉みな異なるべからず。故に足踏に形なく、臨時に應こたずべきを肝要とす。常射足踏ト、ノウ調とると

きは何の足踏イッレとても難かたきにあらず。唯無形を根本として常射足踏の法則を心得べき事なり。

○ 跽之事

ツクハイ

是は両膝を居り敷き両爪先を揃そろえ踵ヒサマツクに 脛イサライを付て射るなり。是を跪ヒサマツクと云。また浮立跪と云あり。是は脛を離して両膝の頭を居て射事なり。また片跽と云事あり。

是は左は膝頭を居り敷き、右は勝手へ踏開腰を浮立て射るなり。 迺すなわち義経記喜

三太働の篇に門外に出、むかつて關木かんぬきを弛し扉のカタかた、押開おき見ければ、くまな

き月に甲の星もキラきらとして内甲すきて射よけにこそ見へたりける。片膝つき矢

つき早に指詰引詰散々射にいる。土佐か眞先かけたる郎等五六騎射落つ矢庭に二人

そ矢にけりとある。是なり此跽當世禮射などの時、或は的或卷藁まきわらなど射時なす事

なり。又此跽に浮立うずして右の足を踏出したる儘にて射るあり。是は躰よく居る

ものなれとも當時禮射等に用さる風俗なり。都すべて跽の類皆足踏を以て考べし。足

踏調る則は跽も異ならず。唯弓手膝頭と馬手に開たる足踏と其の規矩相この事人毎

にあり。心得べき事なり。又矢数など射て修行せるには脛を何物にも懸て射る事

もあり。是は跽の个條と混すべからず別なり。

*1備考
3日目の月
の名称
また新字は
左記参考
跽しり

○胴作之事

胴作は其人の平躰にして少し射物に向い指懸りたるを則ノリとす。是も精心上に凝て、下空虚するものなれば、臍下に力を入れ、全く居り堅固にせるを肝要とすべし。足踏と意味異ならずと知べし。猶なお堅一文字の條と互見合考すべし。

○腰詰之事

是は胴作に付たる事なれとも臍下ちからに力を入れてと云るに仍て腰の固りを掲るなり。即ち腰詰と云るにて腰の居りを堅固にする事と知べし。勿論初中なか後共に心得べくといえども射発つ期にいたりて詰なに到る事肝要なり。唯堅固にして初中なか後の次第を考べし。

○身規矩之事

是は前に云る所の足踏胴作等調る所射物と其規矩備る所あり。是を身の規矩と云、此身の規矩の根本はいつれより成所ナレルと云は、矢壺を志すよりして備る所なり。是を縁の位と云。縁とは糸を引たる如き気を云、此所元来無形なれとも意よりして形を現す。形よりして意備ふ。されは先外を勉て而して内を調るの根本なり。されば身の規矩を定る事肝要なり。其人々にして自然と備所なり。

胴作其人の平躰を可とすると雖射物に少し向い、弓手に指懸て矢を番たる所、既に身の規矩なり。元来無形より生ずる事なれば筆談口舌を以て述かたし。能々鍛練工夫すべし。

臨射

○弓構之事

元来弓構は無形なり。無形とは其射物に因り時と所に順て便利よく構る事を根元とすれば無形とは云なり。射則数个条の中には形を儲ずして自然に備る所あり。此物は弓構など如く自然にせざる事故に無形とは云へからず。但し習に法則なからましかば亦便あらず。故に先づ常射弓構の形を述る。射物に向ひ弓の下躰を左の膝頭に便らせ、弓手の肩口より指先まで睦優に障支なく素直に前に指懸て構へし。斯如くなせば身通前の方に上躰衡なり。乍去弓手の腕入倍に突伸はすにあらず。強ち屈るにもあらず。能程に取べし。偏りたるは、わろし。又蹠の弓構、異なる事なし。下躰を弓手の膝頭の際に坐敷に立て弓形は立射の弓構への

ことく上彌前へ少し衡へし。此餘立射踈共に差別なし。此の弓構調る則は臨時に於て如何にも構べきもの也。自在にせでは叶ぬ事ゆへに無形とは云なり。形に拘り見物を事とする族の知へきことには非ず。能々工夫すべし。

○矢番ノ事

是も臨時に順て矢の茲を取て番ると云、定りなき事なり。或は箴空穂矢籠なとに依て各小異あり。常射にも前腰に矢を指したるを搦と坐席に置たる矢を乗と其違なきあらず。然りと雖、法則なき時は初学の便りにあらず。先づ射付の節の邊りを乗て押手の指に挟み繰出して番ふべきもの也。此繰出す時矢を捻廻すことと手ノ内のあやなり。其なければ箴を懸るに便利ならず。番る所は握と藤との堺を規矩とすべし。箴は勿論一文字に懸べし。是法則の矢番なり。此矢番と云るもの勝負の萌しにして譬は打物の鞞口に手を掛たるに比とし。弦に手掛たるは打物の柄に手を懸たるが如し。されば此所に大事必せるのみ。覚悟すべきの機なり。故に或は早り、或は惰懦ありて、矢番に過出来なり。愆ては成ざるの事なれば、能々慎べきことなり。又常射に矢継早の修行をせるには、矢数を定め其限りを抛ろして繰巡して修行すべし。矢接の手緩は一つの病と云つべし。是等

註・中関ト直角ニスベ
キモノナリ
(光矢 註釈)

*二 矢接ト書ベシ
謂文校正ス

唯手錬にあるのみ。弓と矢和同せる則は至静にして寛急遅速己がものなるべし。古書に矢継早の手垂とある所を克々工夫すべし。

○懸之事

懸口の事 異儀あれとも予が射則は五つ懸にして小腕を上に折て深く強く懸るなり。但し其人に依ては一概にも非ずと雖、大躰矢の筥のたけ程深く懸べし強きとてしかむに非ず。指の節強く屈せず、程能ほどよくかくべし。鍛練の上は言語に述難く、味あじわい出来ぬべし。如此小腕を上に折て 鉞テウオノ形に懸るときは弦道中筋違になるなり。或は其人に因ては免ゆるすへき差別なきにしも非ず。考べし。又前に云へる如く一筋の矢番をするは打物の鞘に手を掛たるかことし。弦に手を掛たるは打物の柄を握たるに等し。されば勝負の骨髓も此場の事に必せり。死地に入て覺悟すべし。

乍さりながら去萌しを魅せず、氣息を貯たくわえて矢を發する期をやかうべし。孫子 軍争の篇、所謂 其徐如林不動如山とある此所なり筆管の及ぶ所にあらず予が射の大事數、个條爰こゝを以もちう發端とす。能く思惟しすべし。

○當掌之事

此事は弓構して手内に當所をせる事なり。弓構したる儘の手内にては 掌快

タナコ、ロ

*1 夜行（百鬼夜行）から転じて静かに行動する意か。

*2 静かなること林のごとく、動かざること山のごとし

(06/09/10)

からず仍よりて握り直すなり。弓構したる儘握直さずして直スクに打起にせる射流も有
けれとも、夫は分薄く幅狭き弓はなること変なれとも、分厚なる幅広き弓は手ノ内に
當所をして打起さざれば成ざる事なり。故に是を究むべし。総じて弓の損利得失
あれとも予か射にては、幅狭き弓を嫌ふに依て此个條を揚るなり。得失試タシて慚
べし。

眼鵠

○見渡之事

是は一の物見なり。射物に立向ひ、足踏せさる以前其射べき物を見渡すなり。
此所に己が弓勢の覚悟ありて其力ちから到へきか到へからさるか見積ることなり。其
なければ流矢マタを射事必定なり。故に先つ物見の内、見渡は最初の一大事なり。能々
工夫すべし。常射的類を射るには矢頃を見窮るも沙汰に及ばず。其間数、弓の強
弱にも拘ず。射手の拙巧を分別するに及ばず。其的の定に仍て間数を定置故なり。
然とも踏芝に臨み、先つ其的を見渡すは射物を見渡すに異ならず。常射にあらず

眞の勝負に見渡す所を心に含て見渡すべし。是かりそめ假初の戯にも実事を亡失すべからざるの儀なり。亦見渡に射物を制する機なくて叶ぬ事なりとも、求て是を成すときは却て虚弱するものなれば、能々案ふべき事なり。意味筆談に及び難しと知るべし。

○志物見之事

是は見渡して矢頃を究たる上足踏より矢を番ひ矢所を志す物見なり。此時其眼をひらかで弦に手を懸て打揚るなり。すなわ迺すなわち前にも述たることく此所の物見は分わきて至静を肝要とすべし。其気形精清と林の如くなるべきものなり。

○徹底物見之事

物見の形を云、則は平躰なり。唯に弓手に振向たるのみにて異なる形を嫌うなり。さりながら乍さりながら去生得にして起臥向斜あり。其人に仍てはゆるすべき免可事なり。都て最初見渡より射納すべまで物見の形異らずを可とす。統すべて物見の心気は異儀なしと雖、此所は引渡して矢壺に其念慮の徹底し、純一と成るを肺肝とす。前に眼をひかでとあるは、此所を念すべき為なり。勝負の骨髓も此期の事なればかな大切なる哉。言舌を以て言へからず。其徐如林不動如山とある是也。能々工夫あるべし。

鎌倉権五郎
ガ事跡ヲ書入

細田源之丞ガ
事跡ヲ書入

○始末物見之事

此の物見は射發して弓を倒さず、其儘射物を見定るなり。譬は敵を打斬て止とどめの刀を刺さすに等し。始末を正しくせる慎つつしみの物見にて無て叶ぬ義なり。勿論氣體共に至静にして不動如山にあらずんば射取もの、有様を見届ること能あたわず。是始終の一大事なり。能々考べし。元來物見は次第するに及ばず。始終同義なり。假かりに儲號ちよごうし修行の楷梯かいていとなす。體を正しく務めずば心氣調はず。故に其次第をも立ると知べし。

○心眼之事

此物元來無形にして言語にも言難く、筆記にも書難し。其の人々の心眼キライの備る所を根本として押手勝手胴作調せりせりいたる所あり。形を以て云べき様なし。師も弟子に伝る事能あたわず。親も子に伝る事能あたわず。唯自得發明にある事なり。鍛鍊實事に迫りなば自然と彼妙所に至るべし。能々悟るべし。前にも出たる如く其徐如林不動如山とある所より其場に至りなん。假令心眼克開よくけたりとも伎わざに及過ざるなれば正中ちゆうじゆうに到ず。伎克調たくとえいたりたくとえと雖、心妄動もうどうして氣塞ふさがり靈明おほを蓋おほふ時は勿論正中をたくとえ得ず。譬敵たくとえと相引して彼矢を内兜うちたわめずに受止めたりとも不膚撓め、不目逃め、己か志す矢

*1 表情に出さない
こと。(06/09/10)

壺を見離さず、射違ふ所ならで心眼の正義と云へからず。故に心眼を伝るものに非ず。其人の發明の期を待のみ。心眼に設所をなす類と混すへからず。能々覺悟すへし。

調彎アン

○打起之事

是は左右の拳を眞直に弓を素直に打揚て、弓手は押、馬手は引、其の眞中に身をはまつて引固るなり。此もの諸流に色々所行ありて其名をも異にすれとも、予が射則は肩入とて、己が力に及ざる程の弓を一張にもあれ二張にもあれ引試て、此所にて弓は引よきものと覺悟したる所を以て、打起の根本とせる事なり。

先此の射則にて、名義を爲ナさんには山形と云る打起を取べし。山形はすなわち 洒 高く打揚て圓まじかに引下す事なり。既に宇治拾遺物語 門部府生、海賊を射る篇に有べき様に弓ユたてして弓を指梓カサししはし有りて打あけたれば、海賊が宗徒の者と云々。異本保元物語 山田小三郎惟行、鎮西八郎に射られし篇に急ぎ二ノ矢を打くわせ、

打揚打揚二三度しけるが正念次第に迷ひければ弓矢を捨てとうと落つ。と記せり。
義経記 佐藤忠信、上野判官を射殺せし條に敵一ノ矢射損し無念にや思ひけん。
二ノ矢を取て番ひ打上る所を能引兵と射る。とあり。源平盛衰記 藤平實光、和田小太郎に勝負を教る篇に敵一ノ矢を放て二ノ矢射んとて打上たらん。眞向内甲頸くびのまわり 鎧の引合透間を守て射給ふべし。と見ゆ。参考太平記 菅丞相射給ふ事を引し篇に番の逢手に立て、雪の如くなる膚を推祖ハタヌき、打上て引下すより暫しばししぼりて堅めたる體と云々 則打揚とある是也。亦此打揚と云るもの騎射に所行あり。是と此の打起と混あぜへからず。似て別なり。又打起あしき則は強弓を射事能あたはず。持固る事能あたはず。達者する事能あたはず。是射伎根本の大事なり。能々工夫鍛錬肝要なり。

○押手之事

押手は人々の生質に依て腕の形を異にするは、腕口押の肩は自然のままのぼす気合にて唯其弓の引よき所を以て押手肝要とす。腕を突伸伸すにあらず。曳受るに非ず。只むくやかに押たわて曲み蹇あしなえずを根本とす。手ノ内は色々ありと雖、中筋を以て可とす。人差指サシユヒを壹本はねる勿はねるべし 小指をしむ 是は手ノ内に當りよく指のしまりシタシ親シタシく握ら

光尖版のみ

光尖版のみ

るゝに依て一本刃るなり。是譬ば力ちからに離て、力ちからに戻ると云もの也。考べし。押す心得中押にして大指の根より競シカケて肩口と縁の離ぬ様に押べし。肩口は落すにあらず。突起すにあらず。其生質の儘を可とす。或は此所に肩口を落し押手を敷き発しの射伸ノヒをなす儲とせる事諸流にあり予か射則は是を嫌なり。徒生質もつほひの儘に推し鍛錬の上は自然と安らけく後の発を思はずして発口速はやかに押さるゝなり。此所のひと號なすけるものに至るなり。但し幼学の人に示すには始は柔かに次第に強く押すへし。と教する也。此は修行の楷梯なり。鍛錬自然の上は何の事もなく其節中を得ると知べし。必しも儲所をして押手を拵しらふべからず。自然の堪能を待つべし。矢数重ならずんば会得なり難しと諛いづべし。

○勝手之事

胴作 押手 懸口 打起 前に述たる如くなれる時は勝手に居固フチツク。小腕上に折れ少し 斫形と成て肱尻ひじ少し下り後口へ旋めぐるべし。是ら予か射則の大格とす但し其の人々の生質よりに仍て一様にあらず。實事の害となる所をば飽まで改べし。其餘人の生質に順い教育すべし。必見分に拘るべからず。能々案ふべし。

○弓形之事

是は弓を打起たる時は高く引被カッかされば弦分山形にならず。此時は弓の形上彌少ホコし後にかふき、下彌少ホコし前に出る引分に仍て、押手勝手けた手桁になるに隨て弓形弦形共にてりもせず、伏もせず、唯清然として支障なきを可とす。但し其人の生質に因て押手勝手に先たちて究りなとせるあり。是は否なる事にて失あり。弓は左右甲乙なく圓まじかニ引静むるを可とすべし。亦弦形を別個條に揚ぬは弓形能備す則は弦形も同事なるが故也。押手勝手過不及なく鈞合肝要なる事なり。能々鍛鍊工夫たてすべし。

○一文字規矩之事

此事は諸流共に用る事にて、足踏 胴作 物見の調たるを豎たて一文字と云、押手勝手両肩調たるを横一文字と云、豎横合して十文字なり。但し其十文字共に見分こたわに拘り、形をためて譬たとえば番匠の規矩準繩をして刪立ケツリたる如く、徒いたずらに其形のみなりたるを豎横の一文字と心得へからず。一文字は豎横共に其規矩を肝要とす故に一文字の規矩とは云なり。元來文字を以ても考べし。墨の濃薄強弱なく系曳たてをしたるか如き一文字は其形は備ると雖、一文字の筆意なければ死物と云べし。書になせる一文字は假令墨たとえの濃薄鈍利ありて、其形見悪けれども言語に述べ難く、筆勢あ

りて活然と其意気あり。是等予か射則の一字の大事とす。必しも愆あやまるへからず。能々工夫すべし。但し斯云はとて、押手 勝手 胴作等 過不及 不釣合を免すにあらず。形につれて規矩を愆あやまり、規矩につれて形調る事なれば、先幼学の楷かいてい梯とすへき所は形の正しきを以て第一とす。此所言語に及び難し。明察すべし。亦此豎一字、横一字に先後體用あり。豎一字は根本にして此定體調ざるは、横一字能よくならず。されば豎一字を以て體とすべし。但し用をなす所は専ら横一字にあり。克々かんが勘かんがふべし。是先後體用あるに非ず。手実学なく武心うしこに疎うそき輩なの為せる所は徒いたずらに見物名聞虚躰を勉つとめとすれば、此一字の規矩に限らず射則不本意の支ことおし。此一字 邪正 虚実 紛まらわしき故に他を對テラン合する也。思惟あるべし。

満固

○付之事

此事は勝手に引おさめたる所を云、付とは右の肩に指先つく付ゆへの呼なり。是も

人々の生質に依て其形定らずと雖いえども予か射則は打起山形と成、勝手の肩より競シカケて肩口を張出して引合するに仍て鉦形の肱形勝手へおちついて付となるなり。
乍さりながら去其人に依ては一概にあらず。假令たとえ鉦形に引合たるとも勝手の肩に離るゝ人もあり。其害になる所を改て必しも形のみに拘こたわるへからず。或は此付に凝付て引固る則は預所をして固ると云ものにて甚はなはだ不可なり。亦弦と引合て固るも不可なり。唯易やすらかに持合て固るを可とす。鍛錬自然の期に至り、弓と同和純一して持固るにあらずんば最上の付にあらず。不鍛錬にして形を以て繕たるは泰だ否なり。能々考ふべし。

○臂形之事

是は中筋違に懸て勝手におちつきたる時鉦形となり、ひけゆき支障なきときは臂尻素直に下りて易らさき形となる。懸口一文字形に成て小腕折る則は、臂尻大に下るなり。懸口大筋違に成るときは臂尻上るなり。是等両様ともに程相にあらず。只懸口中筋違打起山形勝手鉦形と成ときは、臂形素直に治りて其力をも増べきなり。易らかにあらざれば、過不及出来なり。過不及ありては満固せること度、能あたわず。克々かんが勘かんふべし。故に臂形を程能定むべき事なり。

○肅之事シマリ

此事あしく心得る則は甚違ふなり。はなはだ 譬ば押手強く握り、爪先に色見ゆる相にしむる。勝手も大指の砕けよとしめ、向は握詰勝手は引詰なとする事をしまりと思はあやまり 愆なり。是は似て否なるものにてみだり 猥に強く爲さんとするは縮シマリにあらず。縮りは愈は儉約のごとし強ちあなが 姦くせるは喻は吝嗇の如し、克々思惟すべし。唯左右易らけく、偏らず、其事つゝまやかにせるを伎の縮とする也。足踏よりして諸の伎もろもろ 悉くつゝまやかに為す所、皆しまりなれとも此事術の第一とせる所、押手勝手に窮たるもの故に此所に揚るのみ。しまりは心気を根本として伎に至ると雖も、伎拙わざつたな きときは心気も煩乱に至る故に先づ伎のしまりを肝要とすべし。伎藝は心理を先んしては其用空しかるべし。鍛錬工夫して事理兼備、ことわりかねそなえ 肺肝とすべし。

○塩之事

塩とは矢を発すべき節中を指すの名也。遅速強弱 其程相をなす事、言語筆力の及べきにあらず。亦名称を置くも其名呼に泥なすみて節中にあらず。實に言語同断の所なれば塩と云。唯其敵に念慮渡り伎調こいて茲と思切たる所此一大事なり。

異本保元物語に山田惟行か鎮西爲朝と弓の勝負して先たちて内兜に射入たる。も源平盛衰記に上総忠綱が源兼綱を射るに弓を引儲て箭所の静まるを待て内兜を射たる。と有も、遅速の期をなしたる據なり。其外軍記等に類例ありと雖、是を畧す。此塩相節に中らされば、過不及となりて節中をなす事能ず。假令的中ありとも其矢運勢ならず。されば弓を發する期の大事、此塩相に預るのみ。鍛錬工夫 肝要 其至る期、言語同断なり。誠に後遅なる事云べからず。先速なる事測るへからず。能々考あるべし。

心氣

○位之事

此事一段の大事なり。元來位とは坐居の亓にて古語拾遺に千座。亦、中臣祓に天磐座とある。是なり馬鞍をクラと云も馬上の座なればなり。俗に安居せる亓をあくらと云も是なり。されば位は心氣の居処にて形も是に順て行儀をなす譬は釋氏に所謂天上天下唯我独尊とある所を以て思惟すべし。稍もすれば、学者取錯

て其器を手にせざる時は己に慢し、マン 他を憐り巧言し、アチト 器を手に扱ば其事、トレ 術に蓋オ、 わされて怠惰虚慙タイタキヨシヤク になれる者少からず。はなはだあやま 是甚懲れる事なり。タカ(違) 必しも忒ふべからず。オナダリナマケルムナシマケル 能々考あるべき亘なり。こと

○澄之事すまし

清心と云るものは元来心氣の預る所にして他事なし。いえじも と雖其事術修鍊せさればキヨウタク 此事に凝濁して心氣を塞くゆるに心氣安静ならず。ふさ 清心の位に至らざるなり。

又伎調鍊したりとも心氣迷動する時は、亦是が為に蓋おお わされて等閑とうかん(なおざり) すへし。

されは鍛煉工夫あるべきもの也。是を調んが為に諸流或は三つの清心。スマシ 五つのすましもつげ など云る形を儲て外貌の清心を調る事なり。是伎に置いて心氣を調るの義なり。先づ予か射則にても幼學の人を示すに外貌の清心を三段に取分て修行せしむるなり。三段の清心とは、先づ矢番して一清心。引込て一清心。発して一清心。

と定矩せるなり。是修行の楷梯と知すべし。元来清心は数量などの有事にはあらず。心氣の主なり。ツカサ 是敵と相引して其至静運勢を失はず、其徐如林して念の矢所ツホ を施すべき所に止るのみ。後三年記に鎌倉權五郎景正右の目を射させつ、首を射貫ツラヌ きて兜の鉢付の射付られぬ矢を折懸て、當の矢を射て敵を射取とる とある所、

思惟すべし。此所清心の骨髓なり。筆言語を以て及べき^{こと}亘にあらず。自得發明すべし。

○息相之事

息相は一大事の義なり。審固持満調練したりとも息相^{とき}節ならされば其伎に過不及出来、念慮融通せず勿論失色迅速ならず。正中ヲ得ず。故に息相の大事、言語を以て^(尽)盡べからず。鍛錬發明すべきもの也。師も弟子に伝る事不能の所なり。假令^{たとえ}して是を云はんには至精不働して唯一息の期を節にするのみ。敵と相引して更に萌^{きん}しを進る事なく精心寛大なる所に其発すべき期に於て其節中の一息を云なり。考べし。亦守戦の場に於て矢数急発なる事もあらん。時は其息唯熱湯を吹さますが如く出来るだけ口を開けずして息を継べし。必しも口を大に開き腹中より息を突^{つく}へからず。唯息相は無用の息を継^つず慎^{つし}て一息の期を節となすと心得べし。故に自得發明とは云なり。能々考案すべし。然し性格に依り呼吸の度は異なる。

○氣離之事

此个條は唯^{ひとつのみ}独あるにあらず。審固持満鍛練して其念慮矢壺に渡合たる所に勝負の一大事あるがゆへに大切に^{せま}迫り^{かえつ}却て凝を生ずるもの也。此所^{たとえ}喻は流水の

閉戸の淀よどみに濁にごれるか如し其勢氣塞りて意に怠惰となる。されば一事術に過不及出来矢所必中を不得矢勢失力となり恐るべきの甚しきもの也。故に氣の離を个條に揚て此の疑惑を懟せいするもの也。諸个條何れも其事を泰節にせるより生ず是に滞とじこおる事を嫌て氣の離を云なり。氣は心に矢壺を思へば演々と行届が如し。茲に離を第一とする也。心外心内にて淀滞てんたいなく毫毛ごうもうの疑凝キキョクなく勝負死生の場も離れ神速に射発すのみ。喩へは深淵に石を投するに等し能々思惟すべし。

○氣誥之事

是は満固して其念慮推渡る所誥りと成なるなり。誥は緩急遲速の間、其の間其位を取て到れる期を誥と云なり。射術の念慮を達する所此誥に有のみ。乍さりながら去此誥に至りては其餘力盡ては発する事能あたわず。故に誥九分なるを可とす。譬たとえは數量の事も一つよりして八数に到る。此数は極数にて元の一つに帰る数。九の数は一數より筭る所の数を孕ヨウフ哺ハたる数なれば物あつて未盡いまだつきず。九数を超て一を加ふれば、極て盡こつる盡はらみて其伎調しつていはさる。なれば弓術はわきて十分に誥る事を嫌ふなり。九分と云事は矢を發する期に餘勢あらん事を肝要とすれば也。九分とは満未滿の堺なり。此意味言舌を以て演難えんじがたく、筆力を以て記難しるしがたく、鍛鍊工夫して大悟すべし。

発射せる所は實マコト二十分にて毛汗の場所と云つべし。

○響之事

此事は押手勝手放弓ノ道弦之道氣躰餘念なく純一に満固して発したる所、響となるなり。唯ていせい逞勢ときの節になる所を云、其伎少しも偏倚へんいなる則は決して響と云るものならず。此條ひびきと名を付る所、深く味ふべし。唯に射発したる音の仰山なるを云にはあらず。弓氣身純一なるときは自オノツカらひゝきとなる也。強きにもあらず、勿論弱きにもあらず。言語同断の場なり。修行鍛錬して己に發明すべし。
たとえ譬は管弦の音たりとも其事に調達し、器と我と和同せるときは純一して其音聲妙なるに至るか如し。勿論、弓は音楽の器にあらず。彼是比喻せるに及ざる義なれとも其伎の純一なる所を云のみ。何とも云へからさる所に響の大事あり。能々考べし。唯其事に純一たるにありと云の外なしと知べし。

發射

○放之事

是は調彎の條に述たる押手勝手よく成て満固心氣調達し心眼決定して放す所是なり。先其事を以て云則是押手勝手過不及なく喩へは押の手ノ内をしまるに順ひ勝手の懸指も同和してしまり其の發すへき期に至り二念なく切て放つ。即ち前に述たる氣離と互見合考すべし。或は放は勝手にあると云、或は左はなつて右知らずと云。其論盡る事なし。皆過不及を恐て云る條目なり。

元來放は勝手の主る所なれとも此事第一になれは押手に緩み出来て矢所違ひ矢別矢色正しからず。又押手より放ては勝手押手に尅せられて亦矢所差ひ矢別矢色悪く其逞勢くしけるなり。何れを何れと云かたし或は其人に因り、或は其器に仍り定らざるの義なり。唯法則を云ときは押手勝手の強弱と固、和同して一拍子になるを以て放の第一とす。茲に至て其形を號けて中高の放と、鳥口の放と云、燕羽の放と云、下鷹の放と云。種々の異名を設けて其放を大事とするなり。予が射則是其形ある事を云ず。押手の姿勝手懸口の貌前に述たる如く成て唯純一に放るゝの外なし。又放の餘力を云、則是繩を曳合て、中を斬たるか如し其曳合たる繩のかたちに餘るなり。是を理然と云、爰に其人の勢逞あり。正路の修行誠に溷すんは分明なるべからず。能々工夫すべし。

此放に至り、勝負に拘こたわるべからず。雌雄あれば何れ其欲情にまみれて、或は逆尅し、或は生過して忽たちまち放の正義に至らざる也。唯身體手足は鍛煉の上に任せ、気は演々と怠惰なく、心は毛塵も物なく、唯其發期に至て射放のみ。物あれば其物に滞とどまりて神速ならず。其物なきを譬たとえて云んには南無阿弥陀仏と唱たる妙と云か如し。其所言語を以て云へからず。筆記にし難かたし。大悟發明すへし。所謂、教外別伝と云か如し。能々考べし。

○矢色之事

矢色とは矢の道にて射發して矢行の鈍利曲直を云ふなれとも矢行とは云ずして予か射則にては矢色と云ふなり。色は言語を以て云べからざる所にて矢に發し、銳利エイして勢逞なる所に其景色あり。此兇かたちうつる所は言語にも述かたければ矢色と云、勿論射發する期、正直にあらざれば矢色の出あしく勢逞の矢色に至らず。弓氣身純一にあらざれば矢色達せず唯氣事純一にあるのみ。能々考へし。矢色は異本太平記 菅公の事を記せし篇に 番ツカヒの逢手に立合て、雪の如くなる膚ツシハリヌを推祖ツシハリヌき、打上て引下すより暫しばししぼりて、堅めたる體切て放たる矢色弦音弓倒し五善何れも逞勢ありて、矢所一寸ものかす五度の十ツ、をし給ひければと見えたる是也。

矢色は唯に矢の道の正利のみを云に非ず。正利逞勢の場に其色あり。正路の修行に居て真実に迫りセマリなば自然と儲りさと己か眼にも見ゆべし。名聞虚體の者共が知る所にあらず。矢色と云、色の字に迷て好事の理を論ずべからず。勢逞セン尖利の間に色あること叟を知るべし。

○弦音之事

弦音と云る事は曲直推挽(曳)調達(曳)に弓氣身純一に切発する所に弦音を生ず。氣事不可なる。則は弦音或は鈍く、或はは弾つみ過き、或は弾ぴりつき、或は輕忽けいこつに成て弦音の正中に至らず。実正の弦音と云は、其弓の製こたわに拘らず、氣事一同和して発する逞勢のなれる所、弦音の至極とする也。弓により弦に仍て沙汰すること叟にあらず。設所を成て弦音を求る類は名聞虚體の射家者流などが所為にして正路の射手の為すべき所にあらず。弦音の根元は弓勢に有事にて弓勢の根元は心氣にあり。弓は事也。氣は心より発す。故に弦音の根元は無形なりと知へし。譬は平原広野に草本もなくして暴風の勢音を発するが如し。能々考ふべし。名聞虚體の弓家者流などは輕忽けいこつなる上ぶりの弦音を以て至極としり、正路の射家者流とは一言同論にあらず。能々鍛鍊工夫あるべきもの也。

○弓旋之事

是は今俗弓返りと云、同きなり此事は儲もつけて作ナスものに非ず。勝手は引しまり弓手は押懸大指根より押切一拍子に発する所、其勢力餘りて弓返りとなる也。

すなわち

迺すなわち勝手も其切放つ勢、肩口と腕と分離せるが如し。弓は押廻すものなれば、弦行余りて翻ヒルカエるなり。必しも態に作す事にあらず。弓氣身純一に射発する所の餘力弓廻りとなると心得べき也。但し至て握り誥凝付たる手内にては弓廻るものにあらず。鍛錬の上、純一なる拍子に付て廻る事なり。知にあらず。知ずに非ず。言語同断の所にて返るを可とす。或は小笠原の記などに大事の者を射ときは弓返りすべからずと云こと々あり。是は予か射則には不用事なり。其意味、懲悪ノ卷にて互見すべし。

○調子之事

此事は前に述たる塩相と相等しき事なれとも分別して云、則は調子には形ありて、まつ遅速中の三段を常射に勉て是を修行せるも専ら調子の事なり。

調子と云所も其語を以て云べからず。たとえ譬は絲竹の其音相異なつて和同せる如し。弓弦矢の三つを人帯て其事術をなす所和同して其塩相に発する所、調子の大事な

り。調子節中せされば弓氣身純一ならず純一せされば其念を達する事能ず。敵と相引して未発の期に射発するも調子也。射発したる迹あとにて切て放すも調子なり。されは遅速して射発す調子、其場其時に順て定りたる事なし。此調子を修行せんことは常に遅速中の三つを修行して可なり。亦、塩相 調子は相同してけれとも取分て云ときは塩相の己が心中に得る所にして調子は事術の遅速中をいふ其差別なり。能々考て調子を愆るべからず。能塩相の期したりとも調子円ならされは、其節中を得ず。常に修行肝要の所なり。

○矢聲之事

凡て武術に聲を發するものは皆其念慮の兒聲ほうせいとなる也。射術にて其發すべき期、茲そと思込たる時金輪際巖盤カンをも射貫念慮聲に顯るゝなり聲に兒かたちあるに非ず。其射手の念慮の儘に發聲すへき事なり。但し射術の勢は遠く射發し、射貫こと正こと義なれば其發所の聲永く未はりに懸へき事実正と云つへし。其矢勢一寸勝りに遠く發するを全利とす。遠く發するものは其勢強し、弱ければ遠く發すること能はず。又聲を發するに其期あり。其聲の先後にて甚事術の害となる也。發聲節に中らされば無聲の弓に劣れり矢勢の勢力に懸る聲却かえつて其妨さまたけと成なり。大事言語

筆力の及ぶ所にあらず。常に修行して発聲の期、何れの時そや己に大悟すべし名聞虚躰なる射術者などが聲の大事など知べき事にはあらず。正道実事の射術ならは聲の大事自然に發明すべし。容易の^{こと}変に非ず。修行肝要なり。懲悪之卷聲ノ條と互見考合すべし。

斂射

○念之事

是は射取ものに矢の勢、徹底せるを見定、^{たとえ}假令遠丁たりとも己が魂の融通して、其矢活然たる所を念する事なり。此念なくして^{みだり}猥に餘念ある時は一極一矢に勝負を決する事能はず。数多矢を帯たらん程純一に至らず。靈明散乱して数矢もなきに等しかるらん。唯一念の融通して不動を大事とはする也。前眼鵠ノ條始末物見と云るも是に相同し、但し物見は形を以て心氣を定む。念は心氣を根本として物見形躰となる。内外の^{つし}慎能々鍛錬工夫あるべき者也。此念明白にあらされは答矢を射事能はず。答矢を正直に射されば射術の^{つたな}拙き所なり。素より矢を番

て二の矢を想ふは一病にて甚悪むべき事なれとも此个條の場に到ては、此沙汰なくんば念慮の論に踈し。一筋の箭を冥途黄泉の土産と思切て射へき事は勿論なれとも、此所に於て止叟を得ずして答矢の事を出すなり。答矢を以て念とするに非す。一矢の念明白ならされば答矢も射事能はず。と云事にて此沙汰に及びし也。古代より二の矢、答矢沙汰ある事なしとも、予か射則にて強て云ときは一筋に決定して亦一筋の射事なり。幾筋も唯一矢に止るのみ。念慮の明白を正さしか為に答矢の沙汰にも及ふ。能々覚悟あるべきものなり。

○弓仆之事ゆたおし

弓仆は弓を射発して念を達し弓を弓手の腰に收る事なり。されは末彌は身通り前の正中に下り、本彌は後身通りの外に上り雨走形になる也。弦は弓返りの儘、外腕にあるべし。然して馬手に其儘磔附の邊を扞移し、跪て衣服を納むへし。弓仆とは射收て弓を腰に取る所、末彌下るに仍て弓仆と呼外に仔細あるに非ず。或は片蹠などの時も是に異なる事なし。時宜あるべし。亦射物に依て此事あるべからず。射則を述るときは、此條目をも掲ると雖も時と場に因て、此弓仆為さず事なり。鬪射録と互見合考すへし。是と等しからすと慙べし。

以上八部之射則爲分制而作三十八个條是予射則之骨法也焉常所可遂鍛煉工夫者也此卷者以舍邪路可入正路而爲大意故號表題於勸善之卷矣然而對互之撰揭異端射則而以號懲惡之卷矣相竝此二編書可有切磋琢磨者也乎爾

離時

文化二年正月廿日

大野又兵衛一貫識之

帝室本 射則-勸善之卷
より(03.10.25)

此一冊者大野一貫先生射術也雖為骨則汝不殘其

せしむ

志依而令伝授者也日夜旦夕為熟覽當流元意可

あなかしこ

有切磋琢磨者也努力不可有疎畧

穴賢

佐藤清左衛門

河毛勘殿

この一冊は大野一貫先生の射術なり。骨則たりと雖も汝その志を残さずにより而して伝授せしむものなり。日夜旦夕、熟覽たり当流元意を切磋琢磨あるべきものなり。努力疎略あるべからず。あなかしこ

佐藤清左衛門

河毛勘殿

(06/10/07)

光尖版 後書き
(03.10.25)